いたい。

最後に、このような数多い想い出と14年間にわたる業績を残し引退となるわけですが、この間、大渦なく乗り切ることができたのはなによりの幸いであった。引退後は八重山で使用される(?)と聞いておりますが、これからも安全航海と水産業発展のため活躍されんことを祈り、私の想い出とします。

〝くろしお〟乗船記

増殖室　当　真　　武

水産試験場に着任早々、まず図南丸で15日間のマグロ資源調査、続けて７日間の海洋観測の出張を命ぜられた。おまけにその２回の航海とも大きなシケに出会い船に弱い者にとってはまさに洗礼に等しい経験であった。

新参者であっても立って仕事をしたいという意地があるにはあるのだが、ひんぱんに船べりにしゃがみおう吐を繰り返しながら思うことはエライところへ配置されたというのが実感であった。それから１～２年の間に長崎海洋気象台の長風丸や宮崎水試のみやざき丸にも乗船する機会もあった。さらに長崎県の大村湾で夜を徹してカタクチイワシ漁の網上げ作業をしたこともある。

このように船に乗ることに少し慣れた頃にトビイカ資源調査のため〝くろしお〟に乗りこんだのだが、まず初めに気付いた事は本船がよく揺れるということ、居住性が悪いということであった。その中で船長はじめ乗組員が皆経験豊かな良い人ばかりであったことは有がたかった。

ところがあれから10年たった現在は海藻類の増養殖を担当している関係上、大きな船に乗る機会はめったにない。そういうわけで乗船記を書くとすれば古い話しに限定されてくるので適任ではないと思ったのだが、勧められるままに書き綴ってみた。

トビイカ漁場は水深200m 以深の沖合である。出港後一日目の海面は比較的おだやかであったが、２日目から荒れ出しひどい船酔いに見舞われた。ただでさえ気分が悪いときに風向きによって食事を炊く嗅いとエンジン廃棄ガスの嗅いを重ねて受ける時がある。そうなるともう関をきったように船べりに走るしかない。空胃の際のその苦しみは倍加され、さらに進むと草色の胃液が出るようになる。中には血を吐く者さえあるというがそれは最悪に近いであろう。ところが星の降るような深夜にマストを眺めるようにデッキで横になると船のゆったりした動きに応じて星空がゆっくり上下する感覚にひたることができる。また、まるで鏡の上を航海しているような日もあった。それは早朝であったが、朝雲の形、鳥の飛ぶ姿がそのまま海面に映るのである。こういう天候の船上生活が極楽とするならば、台風時や大シケのそ

れは、地獄にたとえられよう。狭い船内で幾日もじっと我慢するしかない時の頭はモウロウとして思考力がにぶり（そうだからこそ何日も過せるはずであるが)、世の中の進歩から１人とり残されたような錯覚におちいる。

話しは大きくそれたが、３日目になってやっと久米島の真謝港へ避難することが決定された。上陸後の最大の目標は胃に清涼飲料水を満たし、スカットさわやかになることであった。しかしヒビ割れたように痛む喉、胃袋にとってはそれはただ味気のないものでしかなく、半分も飲めなかった。翌日再び漁場へ戻った。沖合はまだうねりがあったが、我慢できない程ではなく、気分的にも楽になっていたので仕事もこなせるようになった。

人間の体の機能というものは不思議なものでその頃になると遅くまで話しこんだり、夜食をとるまでになってくる。予定の仕事が終っても照らしぱなしにしておいた集魚灯の下は明るく、いつのまにか魚やゴカイ類の子供が乱舞していてその様子を何気なく眺めていた。すると明るい水中の小魚めがけて突進するように来てたくみに捕えて暗やみに消えていく生物がいるのに気付いた。その行動を数回ながめているうちにある確信をもってタモ網ですくってみた。それは間違いなく３ｍ台のトビイカの子供であった。というのもそれまでの調査でトビイカ雌の熟卵の保有状態が長期にわたっていたことから、その産卵時期は長く、沖縄近海においても産卵されている可能性も予想され、なによりも稚イカが沖縄近海で採捕されてもよいという考えに到達していたからである。こうしてトビイカの稚イカが始めて沖縄近海で採捕されたのである。それを１つ１つバケツに入れ、その飛び上り方、着地の仕方を船上で観察するのも楽しいものであった。

本種は莫大な潜在資源量が見積られているにもかかわらずその生態は不明な点が多い。ここで紹介したのはごくささやかな発見であるがこういう積み重ねも大事と思う。一つの偶然の発見が大きな成果を導き出した例は多いからである。

おわりに、船は周知のように水産研究を支える土台である。〝くろしお〟の沿岸漁業の発展に果した役割は大きい。これまで不便をかこいながら協力をおしまなかった乗組員の方々を含めて本当にごくろうさまでしたといいたい。

〝くろしお〟での試験研究の概況

当　真　嗣　誠

〝くろしお〟は、昭和41年８月に糸満造船所で建造され、以来14ヵ年間、沖縄の沿岸海域の漁場調査や各種試験研究活動に就航してきた。14年と云う永い歳月の中